

まあよく取め、涙を流させず、明日への希望を持ってもらわねば、と思うとき私の心は千々に乱れるのです。女の人がかわいくなって、歯がゆくなって、惜しくって……。(1回生)

キリスト教主義学校に勤務して

内田 慈子

卒業以来二十数年ぶりに母校に帰り、その教壇に立っているが、米国聖公会によって明治十年創立以来百年を迎えた歴史ある母校に勤務して、改めてキリスト教とは何か、キリスト教々育とは何か、この職場で自分はどうあるべきかなど考えさせられている。長い間宗教色の無い学校に勤務することが多かったから、「何故学ぶか」「何をよりどころとして教えるか」という教育の動機づけ、精神的な教育理念について真剣に考えないままに教師という職について来たと思う。公立学校は別として、私立学校はそれぞれ他の学校と比べて「これが特色だ」というものを掲げている。「個性尊重」「人格練磨」などは、生徒募集時のキャッチフレーズでは最も多いものだし、「キリスト教々育」を中心に置く学校の数も相当数にのぼるが、これらはその学校内部にあって実際に事に当る教師にとってはまことにむずかしいことである。現在私自身キリスト教主義学校にあって、その何たるかを考える時、自らの在り方について多くの疑問にぶつかっている。もともと日本のキリスト教学校の多くは、国家教育に対する戦いとして始まったのであり、人間の精神的教育は国家ではなく、キリスト教の力で行わねばならないということから学校を創立したのだと思う。けれど現在のキリスト教主義学校は、「信仰と教育は別のものであり、学校は伝道ではなく教育の場である」という面が強まり、教会から独立し、キリスト教の「信仰」から次第にはなれてきているのではないだろうか。創立の精神、キリスト教主義ということが看板となり、ミッションスクールだから特別な教育をし、しつづけが良く、質が良いのだと自らもいい。他もそれをそのまま受け入れ、更に多くは幼稚園、小学校からの一貫教育も魅力となって、学校も生徒も教師もその旗印の下に集っているのだと思う。実際キリスト教主義学校の教師にノンクリスチャンは多いし、又キリスト者たらんとする熱意が無くても普通校と同じに勤めることができるし、建学の精神についても実感が無く、クリスチャンでないことについての反省や疑問も少ないから、私のような信仰のない者でも、自分の担当教科に対する熱意と、校務分掌をやりとげていけば平穏な日々を送っていられるわけだ。事実学院長が次のように話されている。「学院に就職希望する方々の面接でも、キリスト教々育について深く質問する人は殆んどない」と。昨夏軽井沢で行われた修養キャンプでICUの中川先生が「キリスト教主義学校に職を奉ずる者はキリスト者であるべきだ」と強く述べられたが、私にとって本当にショックであり、自分の在り方への反省を迫られたのである。キリストの福音をのべ伝えることが教会の存立理由なら、キリスト教主義学校はそこから生まれたのだから当然その教師はキリスト教信仰に動機づけられた教育者でなければならないのだと思う。未信者の私がキリスト教主義学校でどうあるべきか、信仰への道を進めるだろうか、進めなければどうすればよいのか。又ノンクリスチャンであっても、キリスト教学校に入学した生徒達——その多くがこれもノンクリスチャンなのだ——を教育指導できるのだろうか。新しい年を迎え

気持ちを新たにして私自身の問題に取り組みたいと思っている。

(3 回生)

このごろ思うこと

林 道子

私は S 3 5 年に卒業して、当時の都庁民生局に就職しました。そう深い考えもなく福祉の仕事をしたいと希望したら、下町のある福祉事務所に配属されました。大卒者はまずケースワーカーにするという局の方針で、私も早速その仕事につかされたのです。この区は山手地区と異なり、大変特殊な地域を多く抱えていました。パタヤ、ドヤ、朝鮮人部落等、私が今までに見たこともないような人々の生活がそこにありました。仕事がかついでいせもあって他所からの転勤希望者は皆無でしたから、欠員はいつも新卒者でうめられ、そのことがかえって職場を若々しい活気あるものにしていました。“どうやって生きていけというんだ！”ともろにぶつかってくる対象者への対応に明け暮れた緊張の日々。さすがにノンビリ屋の私も、今までの自分が内面からつき動かされるような衝撃を受けたのでした。そして、人々の悲惨とつきあうという余り愉快でない仕事をいつのまにか十年以上も続けてしまいました。(昨年、人事異動で児童館と敬老館の仕事にかわるまで。)

又、この間、私は子どもが三人になりましたが、仕事を続けるためには保育(教育も含めて)の問題を解決することが絶対の条件でした。明日から子どもを預かってくれる人をポスターで探すような時代でしたから並大抵ではありません。その頃団地に住む同じような状況の人達(ご主人も)と、子どもの手を引いて陳情に出かけたりしたものです。仕事か家庭か、いつも二者択一をせまられた体験の共有者達は、今でも年に一回集まって、あの頃の話と今日的话题(受験のこと等)に時間を忘れて語りあうのです。でも、今考えてみると仕事と子育てと両方をとるとするのは大変欲張りな生き方を選んだものだと、われながらあきれられる思いがします。そして、くらしに根つきつゝ仕事にたずさわることの意義について、いさゝかの自負心もちょっぴり……。

現在では、婦人が働き続けるための条件も大分整えられてきましたが、先頃総理府が発表した「婦人白書」にもみられる通り、まだ解決されるべき諸問題は実に多いです。特に社会的施策以前の問題として、昔からの根強い因習があげられます。

一例として、職業への関わり方についてですが、男性は幼時から自立して働くように育てられており、社会に出れば男性の仲間から引き立てられ、鍛えられて見違えるように成長していきます。もちろん今日の競争社会ではきれいごとばかりではないし、「競争原理に立つオトコ文明のゆきづまり…」という指摘も一面ではうなずけるのですが、いずれにしても、人間は環境や条件によって成長もし変化もするのですから、学びたい、向上したいという人には、いつもどこでも学習と研鑽の場を開いてほしいと願うのは私だけではないでしょう。

かつて苦難の道を切り開いていった日本の女性達の歴史をひもとく時、私の中に深い感動が広がっていきます。子育てとくらしに密着した地を這うような女達の生き方。それは能率や競争とは次元の異なる、生命につらなるものなのでしょう。さいごに先日の朝日新聞にのっていた早大鹿野教授の一